

今日は七頁の「本願名号正定業」のところから「必至滅度願成就」のところまでをご一緒に拝読させていただきます。どうぞお声をお出しくださってお願いいたします。

本願名号正定業 至心信樂願為因

この南無阿弥陀仏の名号こそ真実の言葉となって
人が生きて往く道を正しく定めるはたらきをします。
み名に込められた、真実に目覚ませようとお心が、
私たちのいのちの根源にはたらきかけ、呼び覚ますのです。

成等覚證大涅槃 必至滅度願成就

だれもが平等ないのちの尊さに目覚めて、
真のさとりの世界に帰することができるのは、
必ずさとりに至らせよう、という
阿弥陀の願いが成就しているからです。

先程ご一緒に「正信偈」と「同朋奉讚」でお勤めをさせていただきました。まさに親鸞聖人が「正信偈」を私どもと一緒に唱えてくださる、そういう感銘を覚えるものでございます。七〇〇年以上昔にいらした親鸞聖人が真宗の教えを明らかにしてくださって、根本のお聖教として表してくださったということは、大変有難いことでございます。大変厳しい時代であります。南無阿弥陀仏の念仏をいただき、本願のお心に触れることにおいて、同じく本願を開いた宗祖と同じ願いをいただいて生きることができる。そういう意味があるかと思えます。

何故そういうことが本当に大事であるかということ、七月でありますのでお盆がもうすぐですね。新盆では七月、旧盆では八月ということでございます。お盆を迎えますと、私たちは先立っていかれた方々のことを思われる。お盆のいわれは、仏陀釈尊の弟子である目連尊者が、先立っていかれたお母さんのことを心配なさってということがお有りになった。

この世界は二一世紀であります。文明は大変進んでおりますが、非常に厳しい、残酷な、人間が引き裂かれるような、そういう問題が絶えません。つい先日もバングラデシュでテロがありまして、たくさんの方が命を失われた。日本人の方も友好で大事な仕事をしておるにも関わらず、無惨に命を奪われたということがございました。まことに悲しいことが絶えない、人間苦というのは非常に深い時代だなど。事故、事件、そういうことが決して他人事ではないということを感じざるを得ないのであります。

そういう中で、私たちが今、生かされて生きておるということは、そのこと自体が私は不可思議の事実であるということをおもうのでございます。七月四日のある新聞に、岡野弘彦さんが選んだ歌が紹介されておりました。

「お母さんを
忘れないでね」と
刻める墓碑
三十六歳で
亡くなりし人

北九州出身の田浦チサ子さんという方の歌であります。これは三十六歳で亡くなったお母さん自身が、残していく子どもに語られた言葉ですね。

墓石には亡くなられた方の法名、死亡された年月日、お歳等を書きます。真宗では伝統的に南無阿弥陀仏という字を書きますね。曾我量深先生や金子大栄先生のお墓が東大谷にありまして、曾我先生のご生存の字で、南無阿弥陀仏という字を正面に書いてあります。金子大栄先生も南無阿弥陀仏という字が書いてあります。

その選者であります岡野さんの言葉には、葬送の形や墓碑名も多様になったが、私は新しいものであまり好まないということが書かれておりました。伝統的なものの重さを尊んでおられるのかなと思うわけであります。

それにしてもこの歌には胸に迫るものを感じました。若く亡くなった母の最後の言葉を刻んだ熱い心の墓。これはお母さんから言えば、大事な子どもさんに対する最後の言葉、遺言となるような言葉ですね。それが「お母さんを忘れないでね」。これは非常に重たい言葉だと思うのですよ。

今は残酷なことがいっぱい世界中で起こっておりますけれども、やはりそこにはお母さんを忘れていたということがあってはいないのでしょうか。悪事をしようとする直前でも、産みの苦勞、育ての苦勞をされたお母さんの顔が浮かべばね、思い留まるということがたくさんあると思います。

私自身も青年時代に些かの苦悩をしまして、冬の海に沖のほうまで出て、ここから先に行けば帰らないかもしれないと思う時に浮かんできたのが、苦勞して育ててくれた父親の顔でした。私はおふくろを幼い頃に亡くしておりますので、おふくろの笑顔というものを知らないのです。亡くなった時に白い布が掛かった姿。それから父親と喧嘩している時の悲鳴を上げているような顔。それからおふくろの郷へ行って、夜抱っこされてしっこしている時の印象。それから溺れた時に抱いてくれたということがあります。それぐらいのことしか私には印象が残っておりません。

しかし、私自身は親鸞聖人の教えに出遇って、先立って行く親の悲しみは深いものであったなということを教えられます。本当の教えに遇うということがなかったならば、どうしても自分の辛さや寂しさが先立って思われるということがあろうかと思えます。この「お母さん忘れないでね」という言葉は、あらゆる人間に通じる言葉であろうと私には思われますがいかがでしょうか。

同じ新聞に、栗木京子さんが選んだ歌が載っておりました。

生きてるよ
苦しみあるも
生きてるよ
今朝も遺影の
息子に語る

これは新潟市の坂井隆思さんという方の歌です。歌を表現するという点において、息子さんの先立っていかれた事実というものを受け止めておられるということを感じます。これはもう極めて人間的な、人間の感情さながらの歌だと思います。

私は自分自身の人生というものに大切な出遇いをいただいたということにおいて、そこにお念仏を忘れないでねという願いが響いてくるということを感じます。何故そういうことを申し上げるかと言いますと、人と人との愛別離苦の悲しみは、これはもう言語に絶するものがあります。これほど切なるものはないでしょう。親を失い、連れ合いを失い、子どもを失う。特に親にとって子どもに先立たれるということは耐え難い辛さであります。また大事な友ですね、そういう人々と別れて

いくということは、切なるものがあります。そういう悲しみが起こるのは何故か。それは人間に生まれたからであると。人間に生まれたということはそこに老い、病み、そして必ず死ということがある。言葉は知っているのだけれども、実感ということにつきましては、私は成る程な、と思うのです。

恥ずかしながら何を隠そう私は八十歳になりました。八十というとね、凄いなのですよ。仏陀釈尊が八十歳。法然上人も八十歳と言われております。中津功は八十歳だけど、お前は何をしたかと言われると、恥ずかしながら、大いなる恩徳に甘えてね、暮らしてきたと言わずにはおれません。こういう聞法の集いにおいて一番聞かなきゃならないのは誰か。ここにいる中津功自身であります。御同朋御同行の御縁をいただいてね、お互いに学び合い、聞き合い、語り合うということを通して、ああそうかと。一番聞かなきゃならないのは私なのだと。聞かずにおれないという、身と心をいただいて生きているのである。

何故そういうことが言えるかという、本願の名号は正定の業なり。すべての衆生を救い遂げなければ、仏とはならないと誓われた。すべての衆生ということは、私たち一人を除いてすべての衆生ということは成り立ちません。それは多数決じゃありませんよ。多数決は本当の解決ではありません。そのことを私たちはもっとよくよく噛みしめなければならないと思います。

だから「お母さんを忘れないでね」というそのお母さんの言葉の中には、阿弥陀様のご本願が本当に有難いと。どうかお念仏を忘れないでねと。仏法を聞くということに心をかけてくださいねと。御仏事が本当に大事なのですよということが言えるかと思えます。その人ご自身のご生涯が、念仏があつてこそ、本願があつてこそ、私自身の人生が本当に尊い人生として、いただくことができた。親子というご縁も夫婦というご縁も本当に尊いものでありますと受け取ることができる。

今朝も遺影の息子に語るという。これも大変ビリビリと響いてくるような歌でございます。それはやはりそれ程の深い悲しみを通して、親子の出遇いに出遇うということが願われているのだと思います。大事な方の死という事実を悲しみの事実を縁として、そこから本当に出遇っていくということが始まっていく。そういう歩みを生きるのが、念仏者の人生であるなあということを私は教えられつつあります。

人間の世界ではどうしても記憶と共に遠ざかっていくことが悲しいかな、ありますけれども。しかしそういう忘れ遠ざかり、あまり感じられなくなっていくというそういう人間の無常ですね。無常の現実において、この無常の身に、その身に貫かれておる真実の願い、本願。真実の願いに触れなければ、人間は生きていけないのです。生きていても空っぽなのです。親子といい、夫婦という間柄の中に、本当にということを感じなければ、空しくてしかたがないと。

子が親を殺すということもあります。親が子を殺すということもあります。ことに浄土の教えの中では、ご承知のように『観無量寿経』の中では阿闍世が、父親である頻婆娑羅王を殺すという悲しい出来事が起こりました。王舎城の悲劇と言われます。そのことが大事なお縁となって、浄土の教えが開かれてくる。これは非常に生々しく、人間の現実に則した非常に大事なことです。何故大事かというならば、決して綺麗事では済まないと。

理想を掲げるのは結構ですが、あんまり個人の名前を出すと恐縮ですが、舛添さんはね、都知事になりました。しかし任期待たずして、辞めざるを得ないという状況に置かれました。私は他人事にできない問題というふうに思うのでありますがどうでしょうか。人様のことは批判できる。まあ批判も本当の批判なら大事なことです。

私は批判と非難とは違うと思います。批判したものは、自己批判として返ってくる。これが本当の批判です。自分だけがいい子になって批判する。それは本当の批判と言えるだろうか。非難はまさに、自分だけがいい子になって、自分は良い子になって、相手をとっちめるわけですよ。現代の

人間はことに非難が好きですね。快感を伴うのですね。批判と非難は違う。

これは「帰命無量寿如来 南無不可思議光」というお念仏に遇えば、道理として教えられ、感じられてくることです。決してどこか遠い世界の綺麗事じゃないのですよ。この身の飯も食わなきゃならず、人間の愛情関係に浮かれたり踊ったり喜んだり悲しんだりする、そういう生身に徹底する。徹底だから、底に通るのですよ。底に通るというのは足元を貫く、足の裏から貫いてね。個人だけじゃなくして、およそ人間の歩みというものは、こういうものでないかと。

文明が進んだという反面ですよ、原始時代には起こされなかったような罪悪。原爆水爆、ああいうものを発明して、一挙に何十万と言う人間を殺害するわけでしょ。ひどい話じゃないですか。そういう爆弾をたくさん抱えて平和だと。ただ人間というのはなんとまあ、悲しいとか愚かとか。それだけの財力を本当の幸せの為に使うならば、どれ程幸せになるかわからない。そういうものを取って、軍事力に使っている。文明国と言われておる、世界の国々が、それを未だに背負っているわけでしょ。

人間の世界では娑婆ですから。そう簡単には武器を必要としない社会は実現しないと思います。しかし武器に頼らなければならないという人間業の闇を見つめる。人間業が抱えている闇ですね、暗黒。それは気が付くと気が付かないとでは大違いです。方向が違ってきます。武力の教えを肯定する方向と、武力の使用を否定する。悲しいことであると。使ってはならないという方向とは違うわけですよ。本願の教えは徹底的に人間業の暗黒を照らす。悲しむ。底の底まで徹底している。これが本願の方向でありはたらきです。

だから聞いてね、わかったかわからんかという、それはね、私はいいい加減だと思うのですよ。そんなことはありません。聞けば必ず必ずと響くものがある。自分自身に感ずるものがある。それが身と心を持って生きておる事実なのですよ。

例えて言えば、自分だけで生きてきたような顔をしておるかもしれませんが、父母を始め、友達や先生や、量り知れない人々の恩恵を受けておるわけでしょう。数えられるようなものじゃないですよ。私たちがこうして今日聴聞できるということは、仏陀釈尊を初めとして、インド・中国・日本と伝わってきて、そしてその中で親鸞聖人が命懸けのご苦勞をしておられた。それを伝えてくださった。そういう大きな恩徳、伝統の中に生きている。それは事実としてそうであります。話ではありません。その事実が気が付くか気が付かないということはその人の人生を本当に大きく変えるような出来事であると思います。

そういうことが「本願名号正定業」。本願の念仏は、人間存在を本当に仏になる身として定めていく、導いていく、そういうはたらきをする。それは、真実の信心こそがまことの因となる。至信心樂は、本願真実のまことの信心に触れて、目覚めて仏になると。浄土に生まれるということが定まるのであると。そういう大いなる意味ですね。

それを受けまして、等覺を成り、大涅槃を證することは、必至滅度の願成就なり。人間存在が本当に生きることのできる道。私はこの二行四句を、人間成就の仏道と。「本願名号正定業」というところには、本願の教えが南無阿彌陀仏の真実の行となつて、真実の信心を生み出し、等覺を成り大涅槃を證することは必至滅度の願成就なり。まことの証しですね。南無阿彌陀仏の念仏となつてはたらき、そこに真実の信心を呼び起こし、この現実の人生を確かに大地に立って、生きていくことができる。そして命終わっていくことができる。そういう仏道を、あらゆる人々の上に開く。立派な人間の上に開くのではないですよ。煩惱成就の凡夫、罪悪深重の衆生。我々。十方衆生の上に。

人間の辛さを尚一層耐え難くするのが、何で私だけがこんな辛い思いをしなきゃならないのということであろうと思うのですが、どうでしょうか。人様は楽しんでいるのにと。閉塞性ですね。自分の中に閉じ塞がるわけですよ。閉塞するとね、見れども見えずということがあるのですね。そう

いう体験を持たれたことはありませんか。私はあります。見れども見えず。ごく普通の人なのだけ
ど。

例えて言えば、子どもの時ですと、友達には綺麗なお母さんがいていいなあと。僕にはお母さん
いない。なんでこんなことあるのだというような。閉塞ということは人間を閉じ籠らせる、大きな
問題点ですね。闇ですね。この闇がなかなか深い。そういう闇を闇として照らし出すというところ
に阿弥陀の本願が人間の悲しみ、苦しみ、三悪道の地獄をその底を貫いて起こってくるような願
です。貫いてと申しましたのは、地獄・餓鬼・畜生は殺し合いが絶えないのですよ。殺し合いをして
悲しみに暮れて泣くならば、痛むならば、決してこのような殺し合いの起こらない世界が願われ
ることじゃないですか。そこには人間の意識を超えた、仏法の言葉で言えば、煩惱の願いじゃ
なくして、煩惱を突き破った願い。これが本願ですよ。煩惱の願いじゃありません。煩惱とい
うことは、愛し愛されて結婚して幸せにいくだろうと思っていたのがそうはどっこいと。愛憎違順とい
うことが起こるわけですよ。

今、日本は高齢化社会であります。高齢者の悩みというものはいよいよ深いものがあるのでは
ないかと思わされますね。親鸞聖人は九十歳まで生きられたと。これはもう高齢者の人間の生き様。
人間であることの姿をね、よくよく身に沁みて感じとられた。仏陀釈尊は八十歳ですよ。大変な年
齢でございます。老いということもその歳になって初めてそうだなということをお教えられる。あん
まり知らないことを知ったかぶりする必要がないということをおっしゃるのです。

そして本願の教えをいただいていくことは人間のどのような状況であろうとも、その人の命をい
ただいて生きる生涯が、人間として現役であると。現役という言葉は大変。吐く息、吸う息のす
ね、息が終わるまでね、現役であると。そして現役を終わってそれで終わるというものではないと
思います。やはり帰ることのできる世界があると。

これは親鸞聖人のお言葉ご自身の作られました「正信偈」を紹介しましたように、

和朝愚禿釈の親鸞が『正信偈』の文

(真宗聖典 五三〇頁)

ということですね。和朝というのは自分の国のことですよ。親鸞が制作した「正信偈」の言葉をね、
ご自分でそのお心を述べておるのですよ。それがね、なんと八十六歳です。『教行信証』を表され
たということはもう親鸞聖人のご生涯の、本当に大事なお仕事であります。

それによって一番救われた方は親鸞ではないでしょうか。親鸞が、ご自身の九十年のご生涯を全
うすることができた。それは日本国に生まれたのでありますけれども、十方衆生というあらゆる人
間存在の苦悩、問題を受けて誕生して、ここに人間成就の道ありと。仏陀釈尊の教えがインド・中
国・日本と伝統された、そういう人々の中に人間成就の仏道が相続されてきたと。そういう大い
なる教えに出遇ったと。そこに浄土真実の教行証を顕すという大仕事をなさったということがあ
るわけでございます。

五三一頁に「成等覚證大涅槃 必至滅度願成就」という言葉について親鸞聖人はですね、成等覚
というのは、等覚を成るといいますね。等覚というのは、仏陀釈尊のお覚りと等しい覚りを得
ることなのですよ。これはスケールが大きいでしょ。大胆でしょ。私たちがお念仏をいただき、
念仏を申して真の信心に目覚めるといえるときに、仏陀釈尊のお覚りと等しい覚りを得るとい
うことなのですよ。これは本当にね、スケールが大きい。成等覚というのは、正定聚のくらいなり
という。正しく定まれる輩。正定聚。真実の信心をいただいた人はこの現世において、仏にな
るといえることが正しく定まれる輩。大涅槃ということは本当の深い覚りの世界です。生死の苦
悩、煩惱の血、垢、

汚濁、そういったものに迷わされることのない、大いなる涅槃なのです。十方世界を包むような大いなる世界、目覚めの世界。

だから本願の名号をいただいて真実の信心が起こるといことは、正定聚のくらいに住して、大涅槃の覚りを證すると。大涅槃ということは浄土ですね。大涅槃は現在の上に開かれてくるのであるけれども、未来。

「成等覚證大涅槃」といとは、成等覚といとは、正定聚のくらいなり。

これは八十六歳の親鸞聖人の言葉ですよ。正しく定まれる輩のくらいといところには、目覚めるという場が開かれ確立されるという、そういう意味ですね。わかったかわからんとかそんなね、夢幻みたいな話じゃないのですよ。だから人間は欲望の世界のくらいには敏感で貪欲ですけれどもね。目覚めるという、本当の意味の立脚地。本当にそこに立つことができるという、そういうことについては案外鈍感ではないですか。

親が子どもを育てるとい場合にも、やはり世間的な欲望とか名誉とかね、そういったものを教え込んでしまうといことがある。一番大事なことが忘れられるといことがあります。だから本願の教えに遇うといことは、人間それ自身、この世界それ自身が、根本から問い直される。別の言葉でいえば、光が当たる。それまで見えなかったのに見えてくる。

例えて言えば、私、今日、総武線で来まして、忘れ物をして遅れましてすみませんでした。まあそれは私の失敗なのですが。例えば総武線乗ったってね、総武線に乗れるといことにはどれ程のご苦労があったかわからんでしょう。だいたい忘れています。ここまで来るといところには並々ならないものがある。金を出せばくるなんてものじゃないですよ。だから私たち自身の命も自分が生まれてきたといところには、そこには並々ならない命の歩みがあるといことを知らされるのです。

一番身近には両親とかね、おじいちゃんおばあちゃんといことがありますけれども。そこまで相続してきているわけですよ。人間にはなかなか見えない、大いなるはたらきをいただいて、私の生活が確かに生かされて生きるという生活がある。これは現生の生活が決まるわけですよ。だから正定聚といことは、不退転とい。再び迷いの生活に飲み込まれない。人間になんか生まれてくるのではなかったと、親が勝手にいことがあっても、そういうことを縁として教えに遇っていく。南無阿弥陀仏の念仏に呼びかけられておる、そういう存在だと気が付くとき、先程の三帰依文ね。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。

いますでに受くといのは誰のことですか。私たち一人ひとりですよ。今生において目覚めると。正定聚、不退転とい迷い一杯のなかにあつて、迷いに飲み込まれない、そういう生活である。

成等覚といとは、正定聚のくらいなり。このくらいを龍樹菩薩は、「即時入必定」とのたまえり。

「即時入必定」といのは、念仏をいただいて信心に目覚めるその時に、必ず仏になる身と定まる。

曇鸞和尚は、「入正定之數」とおしえたまえり。

正しく仏になる身に定まれる数に入ると。御同朋御同行の一人とさせていただくという。念仏僧伽の一人となる。そういう師、友が与えられる。孤独なる存在にね。

だから親鸞聖人にとっては、法然上人との出遇いが本当に深い意味を持っているわけです。御同朋御同行の世界が開かれたということは、人間の計算で数えることができるものではない。そういう感動ですね。等覚を成るというところには、現生に正定聚に住するという深い意味があるわけですね。それは未来の仏の弥勒菩薩と等しいのだということが言われておるのであります。

これはすなわち、弥勒のくらいとひとしとなり。証大涅槃ともうすは、「必至滅度の願成就」のゆえに、かならず大涅槃をさとるとするべし。滅度ともうすは、大涅槃なり。

こういう注釈をしておられまして、私はこの二行四句に触れますと、私たちの人生において人間成就の仏道ということが明らかにされていると。そこに真の原因、因が明らかになる。疫病でたくさんの方々が亡くなられると、普通は疫病が原因で死んだと言われる。しかしそうではない。疫病は縁である。では因は何か。生まれたということである。

いわゆる貧乏についても執着するということが大きな要因としてあります。比べてしまうわけですね。己の満たされないところを数え上げるということがあるわけです。その人間の生きているという事実自身に眼が開かれるならば、人間に生まれたがゆえに両親に会うことができる。友達に会うことができる。僧伽に会うことができる。貧しくても一杯の飯の美味さに会うことができる。なんとうまいという。そういうことがあるわけでしょう。貧しさがいいといっているのではないですよ。その事実には。

私たちの時代はそういうことを体験している時代です。それは太平洋戦争の戦前、戦時中、戦後。今、朝のドラマでやっていますけれども。ああいうのを見るとね、ああそうであったなど。その時代の状況がね、浮かんでくるのですよ。一日三度食べられるなんてね。まして銀飯が食べられるなんて大変なことだということがあるわけです。この事実ということが本当に明らかになるにはね、生きていることの尊さを本当に教えられるということ、因が明らかになるということが大事です。因が明らかになるとね、縁に迷わされることがなくなるということです。必ず死ぬ身であると。死の縁は無量。死の因は生である。生まれたということである。

やはり人間は、長寿にしても、病気にしても、貧乏にしても、自分の願望を満たすことが中心になってしまいます。子育てにおいても私は非常に大事なことだと思うのですよ。子どもの姿というものをよくよく見て、本当に愛するならば、親として子どもの力というか実力というものは自ずと感じられてくるということがあるでしょう。だから無理難題、願望を子どもに押し付けない。無理難題、願望を押し付けるのはそこに親の欲求不満がある。積年の恨みがあると、そういう構造になっていませんか。言い過ぎでしょうか。

もっと言えばね、阿弥陀の本願が起こされたということは、何十年何百年ではないのですよ。命の歴史が始まって已来、人間存在の抱えている深い闇を本当に見つめてね、そこに光が当たる。だからそういう本願に遇うと、個人的な存在が、普遍的な人間存在という、そういう意味を持ってくるわけですね。大いなる命の歴史を歩む中の一人として目覚め、立ち上がるという。そういう曠劫已来という命の歴史ですよ。それは「五劫思惟之摂取」という、永遠に等しいような流転の歴史を超え進んで起こされた本願に遇うということにおいて、私の人生、私の命が五十年、六十年というふうな視野では量れない。大いなる人間の命の交わり、歴史の中に私と言うこの存在が生かされているのであると。因が明らかになるということはそういう意味を持っておるわけです。

そこには量り知れないご縁をいただいて、私という存在があるのだと、そういうことに気付かされていくのであります。それは必至滅度の願において開かれている。四十八願の第十一願です。

たとい我、仏を得んに、国の中の人天、定聚に住し必ず滅度に至らずんば、正覚を取らじ。

必至滅度の願、あるいは証大涅槃の願。これは一宗一派の話ではないのですよ。あらゆる人間存在は名号をいただく。真実の信心に目覚めるとき、現生に正定聚に住して、必ず滅度に至るといふ。そういう必至滅度と。そういうことが私たちの上に実現する。

これは昭和三十六年の御遠忌の七〇〇回の御遠忌のときに、西谷先生が司会で、鈴木、曾我、金子という三先生の対談があって、その中の一つなのですが、娑婆と浄土という問題につきまして、鈴木先生は「娑婆が浄土で浄土が娑婆だ」という、大胆なことを言われるのですよ。これはね、いわゆる般若の世界から言えばそういうことは言えるのです。

しかし人間が生身の現実をいただいて生きておるといふことから言えば、娑婆即浄土といふことは言えるか言えないか。この世界が浄土だと言えますか。義から言えばこの身が仏である、無限であるとは言えない。西洋哲学を研鑽なさった清沢先生という方はね、相対有限、絶対無限といふことを、はっきりと明らかにしておられる。

浄土といふはたらきは、絶対無限ですよ。絶対無限のはたらきに触れて、私たちは有限なる存在であると。有限は絶対無限の中に含まれるわけです。含まれるけれども同じかといふとそうではありません。如来内存在という言葉は私は思うのであります。仏様の絶対無限のはたらきの中の存在でありますけれども、信心を得たからといって私が仏かといふと、そうは言えない。親鸞聖人は何とおっしゃったか。正定聚のくらいに住すると。仏になる身に定まると。現生において不退転。そういう生き方をはっきりと見出すことができる。

それは必ず滅度に至る。必ず至るといふことは、今は大涅槃じゃないと。しかし大涅槃のはたらきがもう既にこの身の上にはたらいている。そういう実感ですね。ただこれは絶対無限の妙有に乗托して、任運に法爾にこの現前の境遇に落在せるもの。有限なる身がそこに落在。落在といふのは落ちてあるといふ、これも面白い言葉です。そこにどんとね、大地に立って生きておると。これは清沢先生の信念の表白なのですけれども、私たちが今ある生活の事実に、本当に足を地につけて生きていくことができるといふ、そういう生き方を生きることができると。そこに、必至といふことにおいて未来が開かれてあるわけですよ。必ず滅度に至る。死んだら骨になるといふことを言う人があるけれども、骨にはなるのですけれどもね。ゴミになるとかそんなもんじゃないのです。必ず滅度に至るといふ。親鸞聖人の『教行信証』の中の言葉には、

臨終一念の夕、大般涅槃を超証す

(真宗聖典 二五〇頁)

臨終一念の夕といふのは命終わるまさにその夕。夕といふのは夜の夕ですね。煩惱のある生身の人間の事実にあって、大涅槃であるといふことはできない。しかし大涅槃の大いなるはたらき、光を受けて、はたらきをいただいて、現生に正定聚に住する。正しく不退転の生活を生きることができると。こういうことが、非常に簡潔な偈文の中に表されてあるのであります。

私がこういただいているのは本当に大海の中の一滴に過ぎないかもしれないけれども、その一滴の教えられた意味がまことに大きく、深く、広いことを教えられるのであります。私自身もなんといふか、あと何年の命かわかりませんがね。いただいた命をね、本当に宗祖に教えられ、「正

信僣」に教えられ、阿弥陀の本願に教えられ、念仏に導かれ、開かれてですね、生きていくことができる。そういう道が開かれているのだなあということを知らされるのであります。

若い時に老いと考えていた老いは、自分自身が現実に歳をいただいて生きる時、大きな実感を持って出遇っていく。だから出遇いということは命のある限り、出遇いなのですね。そういうことを教えられつつあるということでございます。大変時間が長くなりましたが、お話のほうはこれで終わらせていただきまして、後は皆様方の感想なり、ご質問なりをいただけたらと思います。どうも、ご静聴ありがとうございました。